

【以善会レポート】第六弾

晨園による国史編纂の提案

Ⅱ 松崎慊堂への手紙・その2 Ⅱ

中山正清

はじめに

『以善会レポート』第三弾「心学の興隆目指した晨園」では、文政五年（一八二二）に山崎晨園が松崎慊堂に宛てた手紙で、晨園は隠居後に心学の興隆に尽力したいと記したことを紹介しました。晨園はこの手紙で、晨園が資金援助して慊堂を総裁に国史を編纂したいという提案もしています。

慊堂による国史編纂という晨園の希望は叶えられませんでした。晨園がなぜこのような考えを抱くようになったのか、その背景について本稿では考えてみたいと思います。

一、慊堂への手紙

まず、袴田鷹邨著『松ヶ丘山崎家略譜稿本』に載っている「晨園から慊堂への手紙」のうち、国史編纂を期待する個所の全文を以下に示します（句読点、改行、返り点、振り仮名は筆者による。特に難解と思われる語句には注を付しておきました）。

又壹ツの思立ニ者、塙検校なる者群書類従六百巻を初め、其外夥多^{かた}之

綴輯^{ていしゅう}②、盲人ニ而如^{おぼえて}レ斯之盛挙、豊聡の英才ニ者有^はへけれ共、自力に而

成へき理^{ことわり}なし。承り及候へ者、抛^{なげうち}ニ私財一書生を招集^{まねき}め基を起^{おこし}、追々

(1) 夥多..あまた、たくさんの

(2) 綴輯..綴り集める

自身之記憶も広^{ひろ}まり、遂に大業成就いたし候事之由、眼前之事ニ御坐候。
僕痴愚といへ共、苟^{いぢしく}も目あれ者一策有間敷にもあらず。勿論^{もちろん}埒^{すて}氏捨^{すて}レ
資生徒を集メ候義、僕之微力^{びりよく}之及所に者無レ之候得共、分に応し私財を
擲^{なげう}候義於為レ道者毛之^{かる}輜^{（懸）きが}如く存罷在候間、撰著之義如何と士黙^{しもく}江
相談いたし候。士黙云、本朝国史之事六国史之外、林公御先代御撰^{えら}み
本朝通鑑并国史実録等之類曾^{かつて}而承り及居候得共、御家秘に係り候や世
に公行致^{いたしおり}居候様子も無レ之、会津辺之隱士某私撰いたし候本朝通記印
本世に行れ候得共、荒陋^{こうろう}徴とするに足ス。西山公御撰大日本史之儀者
追々御板刻にも相成候由承り候へ共、簡帙^{ちつ}重大ニして寒郷僻地之容易
ニ挾を不レ得所に御坐候。されハ当時皇国之古今を一覽致候編史全備^{ぜんび}
成もの無レ之ニ付、平日歎息^{たんそく}致居候。何卒^{なにとぞ}国史編年彼温史之様成ものを
戮力^{りくりよく}撰述いたし度如何可レ有レ之哉。余日其儀者兼^{かねて}而同意にて有レ之

候得共、蹇驚⁽⁴⁾之重任⁽⁵⁾之怒臂⁽⁶⁾不二自量⁽⁷⁾之甚敷⁽⁸⁾、平生人之感愛
を興し候詩之一首をたに未た手に入さす程之事ニ候得共、況⁽⁹⁾編年史
之事拙之及所ニ無レ之。乍⁽¹⁰⁾去兼而本朝編史公行之善本不二見当⁽¹¹⁾ニ付編
史致度⁽¹²⁾ものニ候得共、国史之義ハ庶人之分際ニ而者編撰いたし候事不⁽¹³⁾
ニ相成一律令ニ而も有レ之哉。勿論⁽¹⁴⁾先輩会津隠士又竹山翁之逸文等之例
も有レ之候得共差支⁽¹⁵⁾ハ無レ之哉、都而不案内之事ニ御坐候。愈々⁽¹⁶⁾差支も
無レ之編述を思ひ立候ニ付而ハ我慊堂先生を総裁に相願、其上先生之
思召⁽¹⁷⁾ニ而書生一両輩相招⁽¹⁸⁾修史之場所者御府内ニ而閑静なる地を卜⁽¹⁹⁾し
戮力專一ニ丹精いたし五六年も相掛り候ハ、略成就⁽²⁰⁾も可レ致哉、是又
壹ツ之思ひ付⁽²¹⁾ニ御坐候。

二、塙保己一の『群書類従』

引用個所の冒頭で山崎晨園は、盲人の塙検校（保己一）が私財をなげう
つて書生を集め、『群書類従』六百巻をはじめ数々の編纂事業を行ったこと
を述べています。

晨園が国史の編纂を思い立ったきっかけは、保己一による『群書類従』

(4) 蹇驚.. 足の萎えた馬

(5) 螻螂.. かまきり

(6) 怒臂.. 肘をいからせる

編纂にあったとみていいでしょう。『新版角川日本史辞典』（角川書店、一九九六年）によると、『群書類従』は全五百三十巻で、散逸の恐れのある国書の本版化が狙い。保己一が諸本の収集を始めたのは安永（一七七二）〜八一）末年頃からとみられ、出版事業は幕府が後援し、鴻池など民間からの援助もありました。

太田善麿著『塙保己一』（吉川弘文館、一九六六年）によると、保己一は目が見えないにもかかわらず水戸藩が編集を進めていた『大日本史』の校正にも関わるほどの学識がありました。また、幕府は盲人に高利貸しの特権を認めていました（『盲目の国学者 塙保己一の生涯』へ埼玉県本庄市教育委員会、二〇一五年）から、経済的にも余裕があり、「書生」を雇って事業を進めることができたのです。

なお、保己一のもとで『群書類従』編纂に従事したメンバーには、五万巻といわれる蔵書を誇った国学者の屋代弘賢もいました。

晨園は手紙で、「僕は愚かではありますが、いやしくも目が見えるので」、「塙氏のように財産をなげうって書生を集めるほどのことは僕のわずかな力ではできなくとも、分相応に私財を投じることは、道のためには毛のように軽い（簡単な）ことです」と、謙遜を交えながらも保己一のような事業を行う覚悟を述べています。そして、史書の編纂について、松崎慊堂の弟子である海野士黙（予介）に相談しています。

三、流布していた史書

士黙は晨園に対し、日本の国史は古代に編纂された六国史（『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』）のほか、林大学頭家が編纂した『本朝通鑑』『国史実録』などがあると聞いているが、幕府が一般への公開を許さないためか、出版はされていないようだ、と知らせています。

『本朝通鑑』は、焼失した林羅山の『本朝編年録』を羅山の子の鷲峯が復元して続編を編集したもので、神代から慶長十六年（一六一一）までの編年史です（『新版角川日本史辞典』）。『続神道体系』論説編の『国史実録』

（一）（神道体系編纂会、一九九八年）の解題は、「『本朝通鑑』は幕府の秘書

で世に流伝しなかった」と記しています。

また、『国史実録』は、『国史実録』(一)解題によると、林鶯峯・鳳岡父子が延宝七年(一六七九)から元禄十六年(一七〇三)にかけて編纂したもので、『本朝通鑑』と同じく神代から後陽成天皇の慶長十六年までの編年史ですが、『本朝通鑑』をやや簡略にしたものでした。こちらは頼山陽らが参照したともいわれ、公開されていなかったわけではありませんが、それほど広まっていなかったようです。

一方、「会津辺りの者が書いた」という『本朝通記』(一般には『本朝通記』と記す)という本は出版されていて民間の者も読むことができたのですが、内容が杜撰で取るに足らないと、士黙は厳しい評価を下しています。また、西山公(徳川光圀)が編纂を始めた『大日本史』はそのうち出版されるであろうが、膨大な量なので田舎で手に入れることは容易ではないだろう、と晨園に告げています。

井上泰至著『近世刊行軍書論』(笠間書院、二〇一四年)によると、『本朝通記』は会津藩の軍学者長井定宗の編で、元禄十一年(一六九八)に刊行されました。江戸時代を通じて最も読まれた日本の通史だったといえます。

『近世刊行軍書論』は『本朝通記』が広く読まれた理由として、江戸時代中期の和学者篠崎東海著『和学弁』(宝暦八年(一七五八)刊)の記述「本朝通鑑は官府にあり、(大)日本史は彰考館にあれば、世の人のやすくうかゞふことはならざらまし」を引用しています。また、中井履軒の『通語』(天保十四年(一八四三)刊)の中の清水中州「刻通語序」から「源義公(徳川光圀)は日本史を撰し、林祭酒(林鶯峯)は本朝通鑑を撰す。然れども其れらの書は、秘して伝わらず。朝士・太夫といへども、蓋し寓目を得ることなし、と云ふ。況んや草茅の民においてをや。今伝はる所は、僅かに栗山氏に保建大記、長井氏に本朝通記(紀)有るのみ」という記述も紹介しています。

晨園の手紙より六十年ほど前の篠崎東海も、約二十年後の清水中州も、士黙と同じく『本朝通鑑』や『大日本史』は民間の者が簡単に見ることができないと述べているのです。

なお、清水中州が『本朝通紀』と並べて挙げている栗山潜鋒の『保建大記』は、保元の乱（一八五六年）から源頼朝の征夷大將軍就任（一一九二年）までを記述していて、「皇国之古今を一覧致候編史」という晨園の希望するものとは異なります。

また、『近世刊行軍書論』は、『改訂内閣文庫国書分類目録』の通史の項から、江戸時代に刊行された国史全般にわたるものを挙げています。それによると、『通紀』以外には『史徴』（寛政十二年〈一八〇〇〉刊）、『皇朝史略』（文政九年〈一八二六〉刊）、『続皇朝史略』（天保二年〈一八三一〉刊）、『日本外史』（天保七、八年頃）がありますが、「いずれも十九世紀に入ってからのもので、十八世紀をも含めて、江戸時代最も読まれた国史の通史は、本書（※『本朝通紀』のこと）と見て間違いなかるう」としています。

晨園が慊堂に手紙を書いた時点（文政五年）で、『本朝通紀』のほかに『史徴』を晨園や士黙も見ることにはできたはずですが、あまり流布しなかったのでしょうか、士黙も『史徴』の存在を知らなかったようです。

『史徴』は、丹波篠山藩主松平信庸が京都所司代在任中（元禄十年〈一六九七〉〜正徳四年〈一七一四〉）、編年史のないことを遺憾に思っ、儒臣松崎祐之に命じて編纂を始めたのですが、信庸・祐之ともに死去。信庸の子信岑が志を継いで儒臣奥平広業に校定を命じたものの信岑らも死去し、曾孫の信彰が中島漁らの儒臣に校閲させて、寛政十二年春に京の皇都書林から刊行されました（西尾市岩瀬文庫『古典籍書誌データベース』による）。

晨園は手紙の後半で、「本朝編史」（日本の編年史）の例として、『本朝通紀』とともに「竹山翁之逸文」を挙げていますので、これについてもみてみましょう。

竹山翁とは、大坂の懐徳堂の学主を勤めた儒者の中井竹山です（『新版角川日本史辞典』）。逸文は、竹山の著で徳川家康を中心とした歴史書の『逸史』を指すと考えられます。『逸史』には、寛政十一年（一七九九）の自序があります（国立国会図書館デジタルコレクション『逸史』首巻）。ただ、これも晨園が望む通史ではありません。

では、民間でも入手しやすかった唯一といえる日本の通史『本朝通紀』

にはどのような問題があったのでしょうか。『近世刊行軍書論』は、まず篠崎東海『和学弁』が「(編者の長井定宗は)文章の理を知らず、語言の道を弁えぬ」などと評していることを挙げるとともに、初板に誤字二百四十二箇所、脱字七十五箇所、数字の誤り七十五箇所、事実誤認五十四箇所、訓点や語順・語法の誤り二十一箇所があり、二板でも三百十七箇所の誤りが残されたままだったとしています。

他にも、鎌倉幕府滅亡の記事が欠落しているなどの欠陥があると、『近世刊行軍書論』は指摘しています。海野士黙の「荒陋徴とするに足ス」という評価は、正しかったようです。

四、歴史への関心の高まり

山崎農園が国史の編纂を思い付いた理由は、松崎慊堂への手紙に①盲目の塙保己一による『群書類従』編纂に刺激された②民間でも手に入りやすく、信頼できる通史がない―ということが書かれていて、その具体的な事実についてみてきましたが、さらにその背景について考えてみたいと思います。

手紙では「何卒国史編年彼温史之様成ものを戮力撰述いたし度如何可レ有レ之哉」(編年体の国史で温史のようなものを力を合わせて編纂したいのですがいかがでしょうか)と慊堂に提案しています。

温史とは、中国・宋の司馬温公(司馬光)が編纂した歴史書『資治通鑑』のこと。『資治通鑑』は周から北宋が始まる前までを編年体で記述したもので、一〇八四年の完成です(『広辞苑』第五版)。朱熹が『資治通鑑綱目』を著すなど、儒者にとっても身近な歴史書でした。

儒者である慊堂に師事した農園も同書を学んだことがあったでしょう。しかし、中国の歴史は学んでも、日本の歴史については、前述のように適当なテキストがないため、十分に学ぶことはできません。農園だけでなく、多くの読書人が同様だったと考えられます。

一方、十八世紀後半から十九世紀前半というのは、幕府による歴史書などの編纂がいくつも企てられ、国学者による研究も進展していた時期でもあります。

前述した塙保己一の業績のほかにも、国学では本居宣長の『古事記伝』が寛政十年（一七九八）完成し文政五年（一八二二）に刊行を終えています。

幕府の編纂事業についてみると、大名・旗本の系譜集『寛政重修諸家譜』は、寛政十一年（一七九九）に編纂を開始し、文化九年（一八一二）に完成。幕府編纂の歴史書『徳川実紀』は文化六年起稿、天保十四年（一八四三）に完成しています。官撰の地誌『新編武蔵風土記稿』も享和三年（一八〇三）に編纂が始まり、文政十一年（一八二八）に完成しています。

これら幕府の編纂事業には、いずれも林述斎が大きな役割を果たしています（『新版角川日本史辞典』）。述斎は、晨園が師事した松崎慊堂の師ですから、これらの編纂事業について慊堂から聞いたことがあるのかもしれない。

晨園の身近なところでも、地誌編纂事業が始まっています。掛川藩による『掛川誌稿』の編纂が始まったのは文化二、三年（一八〇六、〇七）年頃とされています（『掛川市史』中巻〈掛川市、一九八四年〉）。

晨園が『掛川誌稿』編纂に何らかの形で関わったという史料は見当たりませんが、藩士の齋田茂先らが地元の古文書や伝承を調査していることは、晨園の耳にも入っていたはずです。そして、地元で起きた出来事が日本の歴史上でどのような意味を持っていたかが気になったことでしょう。

晨園が慊堂に国史の編纂を提案したのは、以上のような背景があったのではないのでしょうか。

五、『日本外史』

幕末維新期に広く読まれた歴史書に、源平から徳川氏に至る武家の興亡史を描いた頼山陽の『日本外史』があります（『新版角川日本史辞典』）。

同書がベストセラーとなったのは、「一般読者のための平明な文体」で書かれ、文学としてみた場合にも「説得力ある語調と、物語的奇想の続発とによって、単なる通俗史書には終わっていないと思う」（中村真一朗著『頼山陽とその時代』下へちくま学芸文庫、二〇一七年）と評されるような魅力的な内容と表現だったことが要因とされています。

前述したように、晨園など民間の読書人らも国史への関心を高めていたにもかかわらず、『日本外史』以前には適当な国史のテキストはありませんでした。このような読書人の渴望を癒やすかのように登場したのが、『日本外史』だったのです。

『日本外史』は文政十年（一八二七）に成稿して松平定信に献上されていますが、天保七、八年（一八三六、三七）です。晨園は文政十二年（一八二九）に亡くなっていますから、同書を読むことはできませんでした。

おわりに

晨園は慊堂への手紙に「我慊堂先生を総裁に相願、其上先生之思召ニ而書生一両輩相招修史之場所御府内ニ而閑静なる地をトシ戮力専一二丹精いたし五六年も相掛り候ハ、略成就も可レ致哉」（修史事業の総裁に慊堂をいただき、書生一、二人を添えて江戸の閑静な土地で、力を合わせて専念すれば、五、六年も掛ければ事業はほぼ完成するのではないでしょうか）と記しています。

慊堂を含めて二、三人の人員で五、六年かければ完成するという晨園の見通しは、慊堂からみればあまりに安易に考えていると映ったでしょう。また、林述斎の弟子という立場から、述斎が関与している事業についての情報があり、『日本外史』が書かれていたことも知っていたかもしれません。そんな中で安易に歴史書を編纂しても、あまり意味のあるものとはならないと、慊堂は判断したのではないのでしょうか。

とはいえ、国史の編纂という提案の方向性が間違っていないかったことは、前述したように『日本外史』が多くの読者に迎えられたことで明らかです。晨園の手紙は、地方の読書人に国史が待望されていたことを示す、貴重な史料といえることができるでしょう。

（了）